

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K18241

研究課題名(和文) 満洲引揚者の生活再建と地域定着をめぐる歴史社会学的研究

研究課題名(英文) A Sociohistorical Research on the Reconstruction of the Lives of Repatriates from Manchuria and their Social Settlement

研究代表者

佐藤 量 (sato, ryo)

立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講師

研究者番号：20587753

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで十分に知られていなかった満洲引揚者の戦後史に注目し、引揚者がどのように戦後日本社会に定着していったのかについて、引揚者へのインタビューと史料分析から考察した。その結果、引揚者たちは互助組織を形成し、住宅や再就職の斡旋など独自のコミュニティで情報共有しながら生活再建を図っていったことが明らかになった。本研究の成果の一端をまとめ、佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』(東方書店、2020年)として刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、引揚者同士でのみ共有されてきた会報の史的価値を掘り下げたことにある。また、従来の満洲研究では戦前に焦点を当てた研究が多かったが、引揚者の戦後史に焦点をあてて満洲経験をめぐる記憶のあり方を検討したことも本研究の独自性である。本研究の社会的意義は、いまだに日本と東アジア諸国の間であいまいなままになっている歴史認識問題を考える手がかりになる点である。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have focused on the postwar history of repatriates from Manchuria, which has not been sufficiently studied up till now. I have examined how the repatriates established themselves in postwar Japanese society, through their interviews and analysis of historical documents. The study revealed that the repatriates formed mutual aid organizations in an effort to reconstruct their lives by sharing information on housing and employment in their own organizations. Some of the results of this research were summarized and published in Sengo Nihon no Manshu Kiroku [Postwar Japan's Memories of Manchuria] (Eastern Bookstore, 2020), edited by Ryo Sato, Tomohiro Kanno, and Makie Yukawa.

研究分野：歴史社会学

キーワード：満洲 引揚者 戦後日本社会 生活再建 記憶 コミュニティ 会報 オーラルヒストリー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した2016年は「引揚げ70周年」の節目の年であった。敗戦直後の1946年に開始された外地から内地への日本人引揚げは、民間人・軍人合わせて650万人に及び、農業移民の過酷な逃避行や満洲開拓団の集団自決に代表されるような苦難の歴史として知られている。引揚者の逃避行は多くの体験記で「被害の語り」として描かれ、戦後日本社会における引揚げイメージを形成していった。

引揚げという出来事が歴史研究の分析対象となったのは1990年代以降のことであるが、その多くが海外からの過酷な移動過程を分析する研究であり、引揚げ後の生活史にフォーカスして、戦後はどのように生活を再建し、地域に定着していったのか、また自らの満洲経験をどのように認識し記憶していったのかなど、引揚者の戦後史についてはほとんど知られていないのが現状である。こうした問題意識を共有する先行研究として、(1)引揚者の周縁性をめぐる研究、(2)記憶と語りをめぐる研究を参照することができる。

(1) 引揚者の周縁性をめぐる研究

引揚げ研究で先駆的な業績をあげてきた加藤聖文は、「海外引揚げをめぐる歴史と存在は顧みられることのないまま戦後史の奥底に沈黙していった」と戦後日本社会における引揚げに対する認識を端的に指摘する。また山本有造は、満洲引揚者が「侵略者」としてみなされて厳しい戦後生活を強いられたり、周縁化されたりする事例をあげながら、「外地をめぐる公的な忌避と私的な郷愁のせめぎ合いは戦後日本社会に生きた引揚者の心のなかに、表現しにくい『わだかまり』となって残された」と指摘する。このように「引揚げ」とは、単に国境や境界を越えた移動のことを指すだけでなく、引揚げてから戦後日本社会に溶け込んでいく過程においても、その人々の人生に大きく影響する歴史的な事象であると言える。

(2) 引揚者の記憶と語りをめぐる研究

一人ひとりの引揚者のライフヒストリーを分析する研究は、おもに社会学の分野で蓄積されてきた。その中心的役割を担ってきた蘭信三の研究は、それまで文書史料に残らなかったような引揚者個人の経験や記憶を掘り起こすことの重要性を指摘した。また、引揚者の記憶を分析した坂部晶子は、「満洲国」の為政者らによる「開発の語り」(1950～60年代)、「異国の故郷」への素朴なノスタルジア(1970年代以降)、逃避行の語りなど、時代や主体によって異なる満洲記憶の重層性を指摘した。

2. 研究の目的

そこで本研究は、満洲引揚者の生活再建と地域定着に注目し、引揚者の戦後生活史を考察することを目的とする。引揚者の戦後生活史を考察することは、引揚者個人に即していえば、引揚げや満洲での経験がどのように記憶されているかという表象のあり方を問うことである。また同時に、戦後日本社会の満洲や植民地に対する歴史認識も逆照射し、戦後日本社会がいかに加害の歴史や植民地経験を忘却してきたかを問い直すことにもつながるだろう。これは今日にも連続と続く「国民」と「他者」をめぐる包摂/排除に関する現代的問いであるといえよう。

3. 研究の方法

(1) 引揚者が書き残した史料の収集・分析

引揚者が書き残してきた「会報」を収集・分析する。満洲引揚者の多くは、満洲での人間関係に基づいた団体に帰属する傾向にあり、戦後早い段階から会員内部の閲覧を目的とした会報を刊行してきた。とりわけ満洲都市部を中心とする地域や企業の団体や、小学校・中学校など各種教育機関の同窓会、農業移民や軍関係者の団体など、様々な立場の引揚者団体が形成されており、いずれの団体も会報を刊行してきた。

引揚者団体の会報は、敗戦直後から刊行されているものが多く、2000年代まで刊行され続けているものも少なくない。会報を通して、戦後の長い時間をかけて書き手の世代交代も経ながら蓄積されてきた満洲経験者の語りの変遷を知ることができ、集団それぞれの物語や記憶が構築されていく過程を読み取ることが可能になる。

本研究では、さまざまな団体の中でも大連の弥生高等女学校同窓会を取り上げて資料の収集・分析を進めた。女学校の同窓会を取り上げた理由として、引揚女性の戦後史をめぐる事例研究の新規性、1950年代から2000年代にかけて会報が継続的に刊行され、かつ体系的に保存され

ていることなどがあげられる。大連弥生高等女学校の同窓会誌を分析することで、引揚げ後の女学生の生活実践を考察する。なお、大連弥生高等女学校の同窓会誌『弥生会々報』（第1号（1965年）～第46号（2012年））は、玉川大学教育博物館に所蔵されており、当館の協力により研究を進めることが可能になった。

（2）引揚者へのインタビュー調査

東京および京都在住の引揚者5名にインタビュー調査を実施した。いずれも大連弥生高等女学校の卒業生である。インタビューでは、渡満の経緯、満洲の女学校での生活、家族関係、引揚げ過程、引揚げ後の居住地と就職先、結婚と転居など、戦前から戦後にかけてのライフストーリーの聞き取りをした。本研究では、史料調査とインタビュー調査を実施することで、引揚者たちの声を多角的に聴き取ることが試みた。

4. 研究成果

（1）会報の史的価値

まず、これまでの満洲研究では十分に分析されてこなかった引揚者の書き残した会報の史的価値を明らかにした点である。会報とは、極めて主観性の強い史料であり、行政文書のように公的な客観性を担保された史料とは性質が異なる。そのため会報を歴史研究において活用するとき、会報という史料を誰が、いつ、どのような状況で書いたかという社会的背景を確認することが重要である。また会報とは、記載される現地で生活してきた人々の記憶や、地図、写真、名簿、手記など様々な情報が収録された史料である。それゆえ引揚者の会報には戦前から引揚げ、戦後生活に至る歩みが刻み込まれており、人々の生活実態を浮かび上がらせることができる貴重な史料である。

（2）会報の記事目録作成

大連弥生高等女学校の同窓会誌『弥生会々報』を分析するにあたって、エクセルにて会報の記事目録を作成した。研究期間内に、第1号（1965年）から第15号（1980年）までのデータ入力完了し、今後も継続して入力作業を進める。

これまでに完了した記事目録から、1965年から1980年までの大連弥生高等女学校同窓会の活動遍歴や集合的記憶の形成過程を追うことが可能になった。その結果、1972年の日中国交回復を契機として同窓会活動が活発化し、満洲へのノスタルジアを喚起する一方で、中国への加害意識も交錯するなど、記事目録を作成することで葛藤する記憶のありようを確認することができた。

（3）引揚げ女性の語りと記憶の多様性

多様な引揚げ女性の声を分析したことも本研究の成果である。満洲の日本人女性の引揚げ経験は、ソ連軍侵攻による逃避行や、筆舌に尽くしがたい無数の悲劇が世間に知られ、「集団自決」「残留婦人」などに代表されるように、辛く悲惨な歴史的出来事として語られることが多い。しかし、過酷な逃避行を強いられた開拓団の女性たちに比べて、満洲都市部に暮らした女性たちの引揚げは必ずしも凄惨な経験ではなかった。それゆえ、満洲都市部から引揚げた女性たちは、開拓団の女性を思って「後ろめたさ」を感じるなど、引揚げ女性をめぐる記憶と語りの多様性を明らかにした。

また、インタビュー調査では、いずれの引揚者も満洲と日本内地の生活環境の違いに戸惑い、特に日本内地の封建的な家父長制に基づく生活文化に適応することに苦労したと述べていた。このことは、満洲都市部の家庭が核家族を基本としており、加えて現地人を女中として雇用する植民地状況であったことが背景にある。このように満洲と日本内地の生活文化の差異を感じていた引揚者は、地域社会だけでなく家に溶け込むことすら困難であったことが明らかになった。

（4）編著書の刊行とその反響

本研究の成果の一端を、2019年度に佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020年）に採録し刊行した。最終年度の2020年度には、中国現代史研究会など隣接領域の学会および研究会にて書評会を重ね、本書の批評を仰いだ。書評を通して、戦後日本社会において植民地経験が忘却されていくメカニズムの一端を明らかにしたことや、これまで十分に追求されてこなかった「会報」の史的価値など、本書の意義を再確認することができた。

他方で新たな課題も浮上し、中国人側の満洲記憶の分析、満洲「開発」を賞賛する言説に対する批判的アプローチなど、今後の研究に資する有意義な示唆を得ることができた。なお『戦後日本の満洲記憶』の書評は、近現代東北アジア地域史研究会や日本オーラル・ヒストリー学会

など学術領域のみならず新聞各紙でも取り上げられ、『東京新聞』（2020年5月9日 評者：吉田裕）、『信濃毎日新聞』（2020年6月2日）、『週間読書人』（2020年7月24日 評者：加藤聖文）など多くの反響を得た。その結果、2020年7月に第2刷、2021年3月に第3刷を重ねた。

（5）引揚者を招いたシンポジウムの開催

研究活動を通して交流してきた引揚者を招いて、「戦後日本の満洲記憶：引揚者に聞く」（2019年11月24日）と題して一般に開放したシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、報告者が所属する「満洲の記憶」研究会の活動と連動しており、一橋大学一橋祭において実施した。登壇者の古海健一氏と土屋洸子氏には、幼少期を過ごした満洲での生活から、引揚体験、引揚げ後の日本での暮らしを講演いただいた。当日は80名ほどの一般来場者があり、20代の大学生から80代の引揚者の方まで、幅広い世代の人々が参加した。今後も研究活動の一環として引揚者の声を聞くことができる機会を継続して設けていきたい。

参考文献

加藤聖文 『海外引揚の研究 忘却された「大日本帝国」』岩波書店、2020年
坂部晶子 『「満洲」経験の社会学 植民地の記憶のかたち』世界思想社、2008年
佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編 『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年
山本有造 『「満洲」 記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐藤量	4. 巻 13
2. 論文標題 満洲の記憶を問うということ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 53-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤量
2. 発表標題 満洲における学校教育と同窓会ネットワーク
3. 学会等名 アジア教育史学会 2018年度（第27回）年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤量
2. 発表標題 満洲における日本人住居と生活空間
3. 学会等名 マイグレーション研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 佐藤量・菅野智博・湯川真樹江	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 戦後日本の満洲記憶	

1. 著者名 梅村卓、大野太幹、泉谷陽子(編)飯塚靖、張聖東、遠藤正敬、佐藤量、南龍瑞、平田康治、周軼倫、松村史紀、郭鴻、崔学松、鄭成、角崎信也、隋藝、朴敬玉	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 アジア遊学 満洲の戦後 継承・再生・新生の地域史	

1. 著者名 河原典史、木下昭(編) 水野真理子、ディ多佳子、半澤典子、志賀恭子、和泉真澄、高橋侑里、青木香代子、小林善帆、李裕淑、佐藤量	4. 発行年 2018年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 260
3. 書名 移民が紡ぐ日本：交錯する文化のはざままで	

1. 著者名 沈潔、趙軍、佐藤仁史(監修・解説) 佐藤量、菅野智博(解説)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 近現代資料刊行会	5. 総ページ数 83
3. 書名 写真記録「満洲」生活の記憶(別冊解説・解題)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------